

エジプトの軍事的特性

矢野義昭

エジプトはピラミッドで知られるように古代から文明が栄えた。エジプトは現在も、人口約七千九百万人、面積約百万平方キロの中東随一の大国である。軍事的には、『ミリタリーバランス二〇〇七』によれば、陸軍は戦車約三千九百両、火砲約四千四百門、兵力三十四万人、海軍は、潜水艦四隻、主要水上艦艇十一隻、兵力一万八千五百人、空軍は作戦機四百七十一機、兵力三万人、特異な軍種として、対空ミサイル約七百七十基、対空砲約千六百門を有する防空コマンド八万人、合計四十六万八千五百人の正規軍を保有している。

そのほかに内務省管轄中央警備隊三十二万五千人、国家警備隊六万人、国境警備隊一万二千人からなる準軍隊計三十九万七千人、及び陸軍三十七万五千人、海軍一万四千人、空軍二万人、防空コマンド七万人からなる計四十七万九千人の予備役を有している。期間十二ヶ月から三年間の徴兵制が敷かれ、その後も最長九年間に及ぶ再訓練が課されている。二〇〇五年度の国防費は三十八億三千万ドル、国民総生産の四・一パーセントに上る。

中東諸国の間では、正規軍の兵力規模ではイランに次ぎ第二位、国防費では、サウジアラビア、イスラエル、イラン、クウェートに次ぎ第五位である。また四次にわたる中東戦争では、常にアラブ側の主要交戦国として、イスラエルと激闘を繰り返した。その軍事的な存在感も大きい。

歴史は古く、世界四大文明発祥の地であり、紀元前三十二世紀頃には統一王朝が成立していた。紀元前十三世紀、古代最大の戦車戦であるカデシュの戦いをヒッタイトと戦ったラムセス二世の偉業は、今もエジプト軍では戦史教育で教えられている。紀元前三十一年のアクチウムの海戦で、クレオパトラは戦うことなく戦場を離脱して敗北し、古代エジプト王朝は断絶、ローマの属領となった。七世紀にはイスラム化され、十六世紀以降はオスマントルコ帝国領となり、皇帝が任命する総督が統治した。

十九世紀初頭、総督となったムハンマド・アリは、富国強兵と殖産興業に努め、明治維新に匹敵する近代化を一代でなし遂げた。彼が最も重きを置いたのは、フランス陸軍を模範とする近代陸軍の創設である。アラブ系農民を対象として徴兵制を敷き、軍事顧問をフランス軍などから雇い入れ、ナポレオン軍式の教育訓練を施し、近代的編成装備を持つ常備陸軍を創設した。また沿岸警備と地中海交易の安全確保の必要性を痛感し、アレキサンドリアに海軍工廠を造り世界第七位の海軍を建設した。

オスマン帝国とエジプトの連合艦隊は一八二七年、ギリシアの独立運動を支援する英仏露三国連合艦隊との、帆船時代最後の大海戦を戦うが惨敗する。敗戦後ムハンマドは、オスマン帝国政府に負担の代償としてシリア総督の地位を要求するが拒否され、オスマン帝国軍との戦争となった。エジプト軍は、国民軍の意識に目覚めた将兵の士気と近代装備があいまって、旧態然としまとまりのないオスマン帝国の軍に快勝した。

そのさまは日清戦争に勝利した明治日本と類似していたが、日本と同様に勝利の後、列強

の干渉を招いた。特に英国の態度は強硬であった。日本が英国の支援のもと日露戦争に勝利したのは対照的である。その背景には、日本とエジプトが置かれた地政上の立場の違いがある。エジプトは英領インドと地中海を結ぶ戦略的要域であり、かつ日本と異なり英国に近く、大規模な軍の派遣が可能であった。またエジプトでは綿工業振興が図られたが、英国の紡績業と通商上競合関係にあった。

英国は外交攻勢により、エジプトと友好関係にあったフランスを孤立させた後、一八四〇年オーストリア、オスマン帝国と連合して、まずバイルートを占領、シリアに駐留するエジプト軍の後方連絡線を断ち切った。頼みの仏軍の来援もなく、後方を断たれたエジプト軍は壊乱状態となり戦力の三分の二を失った。この敗戦により、エジプトはシリア、クレタ、アラビアなど本国とスーダン以外の領土を失い、常備軍は一万八千人に制限され、大国への夢は絶たれた。

一八五九年、エジプトはフランス人レセップスに開削権を与え、スエズ運河開削を開始した。しかし英国は、自国よりもフランス、ロシアがアジアに近くなることで、インド、アジアでの独占的貿易支配権が脅かされることを危惧した。またジブラルタルからケープタウンに至るシーレーンの安全確保を前提として構築された安全保障体制にも見直しが必要となった。そのため英国は何度も介入し工事の遅延を試みた。

しかし、二百万人のエジプト人農民が動員され、うち十二万人が過酷な労働で死亡するという多大な犠牲を払いながらも、十年余の歳月をかけ一八六九年、ついに運河は開通した。しかし指導者が安易に不利な条件で妥協したため、無償で労力、資材を提供し財源の七割以上を負担させられたエジプトは、財政破綻に陥った。やむなく法外な利息の外債に頼ったエジプトは、二大債権国である英仏の共同管理下に入った。

英国は、スエズ運河開通後は一転して、インドへのハイウェイとしての運河の価値を認め、エジプト植民地化の好機を窺っていた。一八八二年、英仏の支配に反発した民衆によりアレキサンドリアで暴動が発生、これに対処するため艦隊を派遣した英国は暴動鎮圧後も駐留を続け、それ以降エジプトは英国人総領事が支配する実質的な植民地となった。

第一次大戦とともにエジプトは英国の保護領となったが、大戦中の軍役夫二十五万人の負担などに不満が高まり、大戦後反英独立闘争が激化した。終に一九二二年独立を達成したが、その後も政治は安定せず腐敗が横行した。これに憤激したナセル率いる自由将校団が一九五二年にクーデターを起こし共和制に移行した。

ナセルは親ソ路線をとり大規模な軍事援助を受けスエズ運河の国有化を宣言した。しかしそれが英仏の干渉を誘い、シナイ半島の軍事力展開を脅威視するイスラエルとの共同作戦に踏み切らせ、第二次中東戦争が勃発した。これに対し米ソはともに英仏軍の撤退を要求、敗戦後エジプトは再びソ連からの大規模な軍事援助を得て、強大な軍を再建した。

しかしこのような情勢に慢心したナセルは、チラン海峡の封鎖などイスラエルに対する挑発的行動をとり、その先制奇襲攻撃を招き、第三次中東戦争が勃発した。イスラエル軍の周到に準備された空軍と機甲部隊の電撃的作戦によりエジプト軍はなすすべもなく、わずか六

日で壊滅した。将兵の訓練水準が低く、硬直的な指揮により奇襲攻撃に対応できなかったことも大きな敗因であった。

敗戦直後失意のうちに亡くなったナセルの後を受けてサダトが大統領に就任した。サダトはエジプトが戦勝を獲得しなければ、シナイ半島の奪還を目指す外交交渉にすら大国が応じてくれないことを痛感し、密かに軍事態勢の見直しを断行した。

スエズ運河渡河直後に予想される、イスラエル軍の機甲部隊と空軍による反撃を撃破するため、防空ミサイルと対戦車ミサイルを主体とする編成装備に改編した。また渡河器材を充実し訓練を重ねるとともに、徹底した秘匿欺騙を行い奇襲成功に万全を期した。その成果が実り、第四次中東戦争では、スエズ運河の奇襲渡河に成功し、渡河直後のイスラエル軍の航空攻撃と戦車部隊の反撃を、稠密なミサイル火網により撃破した。

その後イスラエル軍の反攻を許し、互角の態勢での休戦となったものの、イスラエル軍に対し互角に戦い、緒戦では優位に立った実績は、国際社会でのエジプトの地位と交渉力を飛躍的に高めた。その力を背景に、一九七七年サダト大統領はイスラエルを訪問し、七九年中東和平条約を締結、シナイ半島の返還合意を取り付けた。その結果サダト自身は暗殺されることになったが、国土を回復し、イスラエルとの間に和平への道を啓いた功績は不滅である。その後もエジプトはイスラエル、アラブ双方とパイプを持つアラブ穏健派の大国として不動の地位を築いている。

エジプトの近現代史は、数多くの英雄的政治家、軍人を輩出してきた。エジプトの歩みは日本と似ているが、地政的制約もあり、必ずしも順調ではなかった。しかし逆境を超え、有能な指導者のもと、営々と努力を重ね現在の地位を築き上げてきた国家的努力には、敬意を禁じえない。